

あいどる

ウィリアム・ギブスン

浅倉久志＝訳

IDORU

William Gibson

I D O R U

めいどる

U

ウィリアム・ギブスン

浅倉久志 II 訳

William Gibson

江苏工业学院图书馆
藏书章

角川書店

ウィリアム・ギブスン (William Gibson)

1948年サウスカロライナ州生まれ。1960年代に徴兵を拒否してカナダに移住。1984年に発表した処女長編「ニューロマンサー」がSF各賞六冠に輝く。サイバーパンクSFというジャンルを世に知らしめる。代表作に「ディファレンス・エンジン」(ブルース・スターリングと共著)、「ヴァーチャル・ライト」(以上2点角川書店)などがある。

浅倉 久志 (あさくら ひさし)

1930年生まれ。大阪外事専門学校英米科卒。SF翻訳家。主な訳書に「ヴァーチャル・ライト」、「時の旅人」(以上角川書店)、「アンドロメダ病原体」などがある。

あいどる



1997年9月5日 初版発行

著者／ウィリアム・ギブスン

訳者／浅倉久志

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替00130-9-195208

TEL 営業03-3238-8521 編集03-3238-8555

印刷所／横山印刷株式会社

製本所／株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Printed in Japan

ISBN4-04-791275-1 C0397

あいどる

IDORU

by

William Gibson

Copyright © 1996 by William Gibson

Japanese translation rights arranged

with Martha Millard Literary Agency

through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

Translated

by

Hisashi Asakura

Published in Japan

by

Kadokawa Shoten Publishing Co., Ltd.

あいどる
○目次

13	文字認識	96
12	光 ^{ミツ} 子 ^コ	91
11	新高層ビル群の崩壊	88
10	ウイスキー・クロン	82
9	アウト・オブ・コントロール	72
8	成 ^{ナリ} 田 ^タ	65
7	アリスン・シャイアズの濡れた温かい生命	54
6	DESH	49
5	結 ^{ノードル・ポイント} 節 ^{ポイント} 点	44
4	解凍されたヴェネツィア	37
3	ほとんど一般人	27
2	ロー／レズ・スカイライン	18
1	デス・キューブK	9

26	黒 ^{ハク・ナーム} 暗	184
25	あいどる	178
24	ホテル・グイ	172
23	このヘウエスタン・ワールドで	164
22	ゴミ・ボーイ	156
21	スタンドオーバー・マン	148
20	モンキー・ボクシング	140
19	アーリー	130
18	おたく	124
17	名声の壁	119
16	ソナ	114
15	秋 ^{アキハ} 葉 ^{ハラ} 原	110
14	東京支部	102

39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27
バン	スター	体験 実習	メリー アリス	未来の たたき台	カジノ	トポロ ジー	招かれ ざる客	物事の 成り行き	エトル リア人	彼女の わらい面	クレジ ットの 問題	このフ ィジカ ルな感 じ
256	252	245	239	233	228	223	218	213	208	203	198	191

解説	謝辞	46	45	44	43	42	41	40
訳者あ とがき		寓話と 再建設	ラツキ ー	聖母	足の指 切り人 の朝食	チエツ クアウ ト	キャン ドルと 涙	取引
289	287	283	282	274	264	261	259	
291								

主な登場人物

レイ・ストーニイ
投影麗

ヴァーチャル「あいどる」

ロー

ロー／レズ（バンド）のギタリスト

レズ（ロザー）

ロー／レズのヴォーカル

コリン・レイニー

スリット・スキャンの元社員

ベリー・ライデル＊

シャトーの夜間警備員

キャサリン（キャシー）・トランス

スリット・スキャンでのレイニーの上司

シンヤ・ヤマザキ
山崎晋也＊

パラゴン・アジア・データフロー社員 社会学者

キース・アラン・ブラックウェル（キーシー）

ロー／レズの警備主任

クリントン・エモリー・ヒルマン

ボルノ男優

アリスン・シャイアズ

ヒルマンの愛人

アーロン・パーズリー＊

テレビ番組の専属弁護士

ライス・ダニエルズ

テレビ番組の専属弁護士

アーリー・マクレー

ロー／レズの技術者

ミチオ・クワヤマ
桑山道夫

レイ・ストーニイ
投影麗のクリエイター

ウィリー・ジュード

ロー／レズのドラマー

ポール・シャノン

ロー／レズの技術者

アルチェーミー

<コンビナート>のロシア人

チア・マッケンジー

ロー／レズのファン

ケルシー

ロー／レズのファン

ソナ・ロッサ

ロー／レズのファン

メリーアリス

チアと同じ飛行機に乗り合わせた女

エディー

メリーアリスの愛人

ミツコ・ミムラ
三村光子

ロー／レズのファン

マサヒコ・ミムラ
三村正彦

光子の兄

ヒロミ・オガワ
小川宏美

ロー／レズのファン

ジュン
潤

クラブのオーナー兼DJ

ゴミ・ボーイ

正彦の友人

エヴゲニー・スタルコフ

<コンビナート>のロシア人

＊は「ヴァーチャル・ライト」登場人物

クレアに

カバー写真

女性：© ZEN PRESS

風景：© 大倉乾吾（提供世界文化フォト）

❖ デス・キューブ K

レイニーはスリット・スキャンを辞めたあと、シャトーの夜間警備員のライデルから新しい仕事を紹介された。ライデルはシャイで悲しげな笑みをうかべたテネシー生まれの大男で、安物のサングラスをかけ、いつも片耳に小型無線機ワイヤレス機をはめこんでいる。

「パラゴン・アジア・データフロア」とライデルはいった。早朝の四時で、ふたりはおそろいの古い特大アームチェアにすわっていた。頭上のコンクリート梁は、手塗りでホワイト・オークに見せかけてある。このホテルのロビーの家具にならって、この椅子もほかでつかいサイズなので、だれがすわってもちっぽけに見える。

「マジかい？」レイニーはたずねた。ライデルのよきな男に新しい就職口の斡旋あきせんができるのだろうかという疑いは、おもてに出さなかった。

「日本の東京」ライデルはそういうと、プラスチック・ストローでアイス・ラッテをすすった。「去年おれがサンフランシスコで知りあった男。山崎ヤマザキ。やつがいまそこに勤めてる。むこうは腕のいいネットランナーをさがしてるんだと」

ネットランナーか。研究者を自認するレイニーは、ためいきをこらえてきいた。「契約社員？」

「だと思う。はつきりとはいわなかったが」

「東京で暮らすのは気が進まないな」

ライデルは、背の高いプラスチック・カップの底に隠された宝を見つけるつもりか、残った泡と氷をストローでかきまわした。「むこうで暮らす必要があるとはいってなかったぜ」目を上げて、「東京にいたことがあるのか？」

「いや」

「きつとおもしろい土地だよ。大地震やなにかがあったあとだし」耳の無線機がチツチツと音を出し、なにかささやいた。「おれはこれから外へ出て、バンガローのそばのゲートを点検しなくちゃならない。いっしょにくるか？」

「いや」とレイニーはいった。「せっかくだけど」

ライデルは立ちあがり、カーキ色の制服のズボンにできたしわを反射的になでつけた。黒いナイロンの網ベルトには、黒ずくめの道具がずらりとホルスターにおさまっている。白の半袖シャツ、妙に動きのない黒ネクタイ。「じゃ、郵便受けへ電話番号を入れとくからな」

レイニーに見送られて、警備員はテラコッタと敷物の上を横ぎり、フロントのデスクの黒光りしたパネルのむこうへ消えた。ライデルがケーブル・テレビのなにかの番組に出たことがあるのを、レイニーはおぼえていた。いい男だ。落後者だ。

彼がそこにすわっているうちに、夜明けが高いアーチ窓から忍びより、暗い洞窟めいた朝食室から、台湾製ステンレスのカチャカチャぶつかる音が聞こえはじめた。移民たちの声。大むかしの大汗たちになら通じただろうモンゴル草原の方言だ。タイル張りの床と高いビームから、こだまが目ざめた。この床も、ビームも、レイニーの同類か先祖の誕生、有名人の生態学や恐ろしくも侵しがたい食物連鎖の

秩序の到来が目撃された時代からの生き残りだった。

ライデルはレイニーの郵便受けに、折り畳んだシヤトーのメモ用紙を入れていった。東京の電話番号。レイニーがそのメモを見つけたのは翌日の午後で、弁護士からきた最終的な請求金額の見積書がいっしょにはいつていた。

レイニーは、もはや宿泊費を払えるあてもない自分の部屋へそれを持ち帰った。

その一週間後、レイニーは東京にいた。押しつけがましいほど無特徴な亜羅魔^{オー・ライ・モリ}亜ビルの三階へのぼる途中、エレベーターのなかでは金色の脈模様のはいった鏡が彼の顔を映していた。指定された待ちあわせ場所のヘデス・キューブKは、フランツ・カフカのテーマ・バーらしい。

レイニーはエレベーターを出て、金属プレートに〈変身〉という文字が食刻された細長いスペースにはいった。スーツの上着をぬぎ、地味なネクタイをゆるめた、白ワイシャツ姿の「ざりまん」が、わ

ざと腐食させたスチール・カウンターの前に腰かけ

て飲んでいる。椅子の高い背もたれは、茶色のキチン質に似た樹脂を成形したものらしい。昆虫もどきの大顎が、客の頭上へ大鎌のようにせりだしている。

レイニーは褐色の光のなかへ足を進めた。低い会話のざわめき。日本語はちんぷんかんぷんだ。ところどころが透明な壁には、翅鞘しよとふくらんだ腹部のモチーフが反復され、規則的な間隔をおいて、とげの生えた褐色の脚が折り畳まれている。レイニーは足どりを早め、カーブした階段をめざした。階段はつややかな茶色の背甲に似せてあった。

ロシア人娼婦の視線が、バーの向かい側のテーブル席からレイニーを追っていた。ゴキブリ色の照明のもとで、彼女たちは生氣のない人形のように見える。このナターシャたちは、*「コンビナート」*がウラジオストクから送りこんだワーキング・ガールだが、いたるところで目につく。型どおりの整形手術が生みだした殺風景で大量生産的な美しさ。スラブのバービーちゃん。もうひとつの簡単な手術で彼女たちに移植されているのは、ヒモの便宜を考えた位

置通報装置だ。

階段の先は「流刑地」というデイスコだったが、この時間には客もなく、ダンスフロアを横ぎるレイニーのステップを無音の赤い稲妻の脈動が照らしているだけだった。天井からは一種の機械がぶらさがっていた。古い歯科治療器具を思わせる関節つきアームの先端に、何本も植わった鋭い鋼鉄の針。ペンだ——カフカの小説をぼんやり思いだして、レイニーは気がついた。囚人の背中の皮膚に罪名を彫りつけるペン。視力を失った仰向きの目の記憶が呼びさまされ、一瞬ひるんだ。その記憶を押さえつけた。先に進む。

もっと急でせまい第二の階段をのぼりきり、天井が低くて薄暗い「審判」にはいった。壁は無煙炭の色だ。青いガラスの奥で小さい炎が身ぶるいしている。レイニーはためらった。夜目がきかず、時差ぼけが残っている。

「コリン・レイニーか？」

オーストラリア人。巨体。小さいテーブルのうしろに立ち、熊のように両肩を丸めている。剃りあげ

た頭の形がなんとなく奇妙だ。そしてもうひとり、はるかに小柄な人影がすわっている。日本人。長袖の格子縞のシャツ、だぶついた襟もとまできちんとかけたボタン。丸いメガネの奥でしきりに目をしばたたきながら、レイニーを見あげている。

「掛けたまえ、ミスター・レイニー」と大男がいった。

いまレイニーは、大男の左耳がないことに気づいた。鉄で切りとられたように、らせん状のつけ根しか残っていない。

レイニーがスリット・スキヤンに勤めていたところの上司は、キャシー・トランスという女性だった。

極度に色の淡い金髪。透明に近い白い肌には、光線のかげんで、血液でなく麦藁色の液体が流れているように思えた。左の太腿には、よじれて刺だらけの形をした藍色の刺青。高価で犖猛な絵文字だ。金曜日ごとに、彼女がショーツをはいて出社すると、その刺青が見えた。

キャシーは、有名人の特質がどんどん磨耗してい

く、いつものぐちをこぼした。それは彼女の同業者の何世代かが露天掘りをつづけたからだろう、とレイニーは思った。

キャシーはホットデスクの出っぱりに両足をのせていた。架線作業用のブーツをひとまわり小さくした丹念な複製で、靴の甲を横ぎってバックルがつき、編みひもで足首までがっちり固めてあった。レイニーは彼女のひきしまった脚線美に目を走らせた。ウールっぽいソックスの上端から、短く切って紙やすりかけたジーンズの裾まで。藍色の刺青は、人類がその記号またはメッセージをなんとも解釈するように、宇宙の彼方からそこへ焼きつけられたべつの惑星の産物に見えた。

レイニーは彼女にいまの言葉の意味をたずねた。キャシーはミント・フレーザーの爪楊枝のラッパを剥がした。元来は灰色らしい瞳が、ミント色のコンタクトを透かして彼を見つめていた。

「もうだれも、ほんとの意味では有名でなくなったのよ、レイニー。それに気がついた？」

「いや」

「つまり、真の名声ということ。いまの時代に、名
声はもうたいて残されていない。むかしの意味で
は。ひとり歩きをするほどには」

「むかしの意味？」

「われわれはメディアなの、レイニー。われわれが
くそ有名人を作ってる。一種の綱引き関係ね。彼ら
は創造してもらうためにわれわれの門をたたく」

靴底の鋌がホットデスクを軽くけった。キャシー
がブーツの踵をデニムのおしりへひきよせたため、
白い膝で唇が隠れてしまった。その姿勢のまま、彼
女は関節つきのスウェーディッシュ・チェアの上で
バランスをたもった。

「しかし」とレイニーは自分のスクリーンにもど
りながらきいた。「いまも名声は存在する、ちがうか
な？」

「でも、本物といえる？」

レイニーは彼女をふりかえった。

「われわれはそれを材料に紙幣を刷ることをおぼえ
たのよ。わが王国の通貨を。やがて、それは刷りす
ぎになった。視聴者もそれを知っている。視聴率に

現われている」

レイニーはうなずいた。早く自分の仕事にもど
りたかった。

「ただし」とキャシーはひろげた両膝に彼の目をひ
きつけながらいった。「われわれが有名人のだれか
を抹殺しようと決めたときはべつよ」

キャシーの背後には、〈ヘケージ〉の陽極処理され
た金網塀のむこう、あらゆる汚染の色彩を濾過する
長方形の窓ガラスごしに、完全に空白なバーバンク
の空がひろがっていた。宇宙の工事請負業者がよこ
したスカイブルーの塗料見本のように。

大男の左耳の縁は、ワックスのようになめらかな
ピンク色の癬痕組織にとりまかれている。なぜ形成
手術をしなかったのかと、レイニーはふしぎに思っ
た。

「思いだすためだ」レイニーの視線を読んで大男が
答えた。

「なにを思いだすんです？」

「忘れないようにだ。すわれよ」

レイニーが腰をおろしたのは、椅子とは名ばかりのしろもの、黒い合金のロッドとラミネートのヘキサセルを使ったひよわな細工だった。テーブルは丸くて、車のハンドルの大きさに近い。青いガラスの奥では、小さい蠟燭ろうそくの炎が空気をなめている。格子縞のシャツとメタル・フレイムのメガネの日本人は、激しくまたきをつづけた。レイニーの目の前で大男も腰をおろした。これまたきやしゃな椅子が、筋肉だけでできあがった相撲取りのような巨体をあぶなっかしく支えた。

「時差ぼけはだいじょうぶか？」

「錠剤をのんだから」SSTの静けさと、一見ゆれのない感覚が思いだされた。

「錠剤を」大男はいった。「ホテルは適切か？」

「ええ。面接の用意はいいですよ」

「それで」大男は傷痕のある大きな手で威勢よく顔をこすりながらいった。その手をおろし、レイニーの顔を穴のあくほど見つめた。レイニーはその視線をかわし、相手の服装を目にいった。極微孔繊維ナノポアのトレーニング・ウェアで、この男よりは小さくても、

ふつうの大男にならたつぷり余裕があるはずのサイズだ。色あいは、〈審判〉の部屋が薄暗くてよくわからない。襟から胸骨のあたりまでがはだけられ、なみはずれた巨体の圧力でいまにもはりきけそう。むきだしの肌には地図のような傷痕が走り、あきれほど多彩な形と肌理きりを見せている。「それで？」

レイニーは相手の傷痕から目を上げた。「ぼくは求職面接にきたんです」

「そうか？」

「あなたが面接の担当者？」

「担当者？」どっちつかずの渋面で、はつきり義歯とわかるものが大きくのぞいた。

レイニーは丸いメガネの日本人に向きなあった。

「コリン・レイニーです」

「山崎晋也シンヤ・ヤマザキです」男は手をさしだした。ふたりは握手した。「電話でお話ししましたね」

「あなたが面接の担当者？」

まばたきが激しくなった。「すみません。ちがいます」といつてから、「わたしは実存社会学の研究者です」